

【特別寄稿】

世界遺産でつづる波乱の西アジア史 ～ヨルダン・シリア・イラク・トルコ・イランの事例から～

Understanding the ever-changing history of West Asia
through World Heritage sites:
Focusing on Jordan, Syria, Iraq, Turkey and Iran

岡田 保良*

要約

世界遺産条約が提起する最上位の目論みは、多くの日本人が期待するような町起こしや観光資源化にあるのではなく、現状を放置すれば失いかねない自然と文化の価値を国際社会が協力連携して救済しよう、というものである。同時に、一群の登録された遺産やその候補遺産からもたらされる情報は、各国あるいは地域に固有の歴史や文化がどれほど多様かという状況を、最もコンパクトな形で私たちに知らしめてくれる。そうした観点から、西アジア地域に焦点を当てて今日の世界遺産事情を俯瞰する。

キーワード：西アジア、世界遺産条約、世界遺産委員会、世界遺産一覧表、危機に瀕した遺産、パレスティナ、メソポタミア、ペルシア帝国、ユネスコ、イコモス

1. はじめに一世界遺産のいま

いまやすっかり馴染み深い単語となった世界遺産だが、「世界遺産とは何か」と改めて問われるとすれば、果たして如何に答えればよいだろうか。筆者なら「1972年にユネスコ総会で採択された世界遺産条約（正式には Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage）に基づき、世界遺産委員会が、別に定める基準 criteriaに照らして顕著な普遍的価値 Outstanding Universal Value（OUV）を有すると認め、同委員会が作成する一覧表に記載された不動産をいう」と答えることになる。そこには、条約、世界遺産委員会、基準、顕著な普遍的価値など、私たちの日常では接することのない用語や概念が横たわるものの、それら個別の問題については、いまや容易に調べがつく時代であるのでここでは深入りしない。また個々の世界遺産事例について情報を入手しようとすれば、ユネスコ世界遺産センターが運営するウェブサイトをはじめ、¹⁾ スマホ一つあれば容易に目的を果たすことができるので、同様にここでの課題とはしない。本稿の

* 国士舘大学名誉教授

目的は、今や地球上に少なからず点在する世界遺産を、ある文化圏において群として捉えたとき、そこに何が見えるかを例示することにある。

日本を例にとれば、1992年に国会承認に至ってようやく世界遺産条約の仲間入りを果たし、その後は毎年のように国民的話題にのぼり、2021年10月現在、20件の文化遺産と5件の自然遺産が世界遺産一覧表に記載されるに至っている(表1)。²⁾ いまやそのブランド力は、観光産業上、きわ立った存在感を示す。またそうした経済効果とは別に、世界遺産という制度が、来訪者の多寡にかかわらず、国土に刻み込まれた日本固有の自然と文化の豊かさ、そして歴史の厚みを発信することのできる稀有でかつきわめて有効な手段になっていることを見逃してはならない。

他方全世界に目を向けると、その総数は1154。内訳は文化遺産897、自然遺産218、複合遺産39となっている。そして今日までにいったん登録されながら削除されてしまった遺産が、自然に1件、文化にも2件だけある。³⁾ さらに、登録されながらも現状が改善されなければ、世界遺産としての価値を失い、一覧表から削除される事態もありうるという、危機に瀕した遺産(Heritage in danger危機遺産)52件をその総数に含む。⁴⁾ 実のところ、世界遺産条約が提起された最上位の目論みは、日本人の多くが期待するような地域起こしや観光資源化にあるのでは決してなく、その本旨とは、

表1. 日本の世界文化遺産(登録順、2021年8月現在)
(遺産名称脇のカッコ内は所在都道府県、登録年次、評価基準⁵⁾を示す。)

法隆寺地域の仏教建造物(奈良、1993)(1, 2, 4, 6)
姫路城(兵庫、1993)(1, 4)
古都京都の文化財(京都・滋賀、1994)(2, 4)
白川郷・五箇山の合掌造り集落(富山・岐阜、1995)(4, 5)
原爆ドーム(広島、1996)(6)
厳島神社(広島、1996)(1, 2, 4, 6)
古都奈良の文化財(奈良、1998)(2, 3, 4, 6)
日光の社寺(栃木、1999)(1, 4, 6)
琉球王国のグスク及び関連遺産群(沖縄、2000)(2, 3, 6)
紀伊山地の霊場と参詣道(奈良・和歌山・三重、2004)(2, 3, 4, 6)
石見銀山遺跡とその文化的景観(島根、2007)(2, 3, 5)
平泉－仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群(岩手、2011)(2, 6)
富士山－信仰の対象と芸術の源泉(山梨・静岡、2013)(3, 6)
富岡製糸場と絹関連遺産群(群馬、2014)(2, 4)
明治日本の産業革命遺産－製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業(長崎ほか7県、2015)(2, 4)
国立西洋美術館(本館)(東京、2016)(1, 2, 6)(「ル・コルビュジェの建築作品群」として)
「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群(福岡、2017)(2, 3)
長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産(長崎・熊本、2018)(3)
百舌鳥・古市古墳群(大阪、2019)(3, 4)
北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群(北海道・青森・岩手・秋田、2021)(3, 5)

現状を放置すれば失いかねない自然と文化の価値を国際社会が協力連携して救済しよう、というものである。このことは条約の前文に明記されており、条約に基づいて作成される危機遺産のリストは、地球上の自然の脅威や国際的な地政学などを色濃く反映することに注意したい。

とはいえ、各締約国とも自国が誇るべき歴史と文化を国際社会に向けて発信しようという意図は明らかであり、一つの国や地域の世界遺産を外部からその全体を眺めるとき、容易には知りえないそれぞれの文化の様相や錯綜する歴史の断面を、半世紀わたって練られた世界遺産というツールによる情報の蓄積の結果として、私たちは共有することができるのである。イラクとシリアの世界遺産を例にとれば、その価値として、古代から近代にいたるオリエント文明を様々な角度から体现すると同時に、多くが危機遺産に認定されていることから、今日の憂うべき国際情勢を読み解く素材ともなっている。そうした観点から、世界遺産の実相を見ていくことにしたい。

2. 西アジア地域の国・地域別世界遺産登録の歩み (2021年10月現在)

オリエントとも呼ばれる西アジア地域を文明史あるいは民族誌的な脈絡でとらえると、イラン、トルコ、アラブの3大文明圏として理解することができる。ここではそうした地域でどのような人類史に刻まれた歴史が世界遺産一覧表に登録されているかを概観する。アラブの国としては、早くに文明の舞台となる一方で近代に英領となったイラク、ヨルダン、旧仏領だったシリア、レバノンに限り、加えて、小国ながら重い歴史を担うイスラエル、さらにはパレスティナやエルサレムの特殊事情にも配慮し、以下にそれぞれの国や地域が保有する世界遺産を一覧する。

(記載の順はユネスコ世界遺産センター作成の一覧表の順に従うが、自然遺産は各国末尾に集めた。国名に添える数字は世界遺産条約加盟の年。危機遺産、複合遺産に該当する場合はその旨付記した。遺産の日本語名称も同じ一覧表の日本語訳に従うが、訳のない場合は筆者による。各遺産名につづく () 内数字は、一覧表記載年及び適用された評価基準の番号を示す。)

イラン・イスラム共和国 (1975) 計26件

- ・ペルセポリス (1979, 1,3,6)
- ・イスファハンのイマーム広場 (1979, 1,5,6)
- ・チョガ・ザンビール (1979, 3,4)
- ・タハテ・スレマーン (2003, 2003, 1,2,3,4,6)
- ・バムとその文化的景観 (2004, 2,3,4,5)
- [2013危機解除]
- ・パサルガダエ (2004, 1,2,3,4)
- ・ソルターニーエ (2005, 2,3,4)
- ・ビソトゥーン (2006, 2,3)
- ・イランのアルメニア修道院群 (2008, 2,3,6)
- ・シューシュタルの歴史的水利施設 (2009, 1,2,5)

- ・アルダビールのシェイフ・サフィー・ユッ
ディーンの修道院と聖者廟複合体 (2010, 1,2,4)
- ・タブリーズの歴史的バザール複合体
(2010, 2,3,4)
- ・ベルシア庭園 (2011, 1,2,3,4,6)
- ・イスファハンのジャーム・モスク (2012, 2)
- ・ゴンバデ・カーブース (2012, 1,2,3,4)
- ・ゴレスターン宮殿 (2013, 2,3,4)
- ・シャフレ・ソフテ (2014, 2,3,4)
- ・メイマンドの文化的景観 (2015, 1,2,3,4)
- ・スーサ (2015, 1,2,3,4)
- ・イランの地下水路カナート (2016, 3,4)

- ・歴史都市ヤズド (2017, 3,5)
- ・ファールス地方のサーサーン朝考古景観 (2018, 2,3,5)
- ・ハウラマン／ウラマナートの文化的景観 (2021, 3,5)
- ・イラン横断鉄道 (2021, 2,4)
- ・ルート砂漠 (自然2016, 7,8)
- ・ヒルカニア森林群 (自然2019, 9)

イラク (1974) 計 6 件

- ・ハトラ (1985, 2,3,4,6) [危機]
- ・アッシュール (カラット・シェルクット) (2003, 3,4) [危機]
- ・都市遺跡サーマッラー (2007, 2,3,4) [危機]
- ・エルビル城塞 (2014, 4)
- ・南イラクのアフワール：生物の避難所と古代メソポタミア都市景観の残影 (複合2016, 3,5,9,10)
- ・バビロン (2019, 3,6)

イスラエル国 (1999) 計 9 件

- ・マサダ (2001, 3,4,6)
- ・アッコ旧市街 (2001, 2,3,5)
- ・テル・アビーブのホワイト・シティー近代化運動 (2003, 2,4)
- ・聖書時代の遺丘群：メギッド、ハゾール、ベール・シェーバ (2005, 2,3,4,6)
- ・香料の道：ネゲブの砂漠都市 (2005, 3,5)
- ・ハイファ及び西ガリラヤ地方のパハイ聖地群 (2008, 3,6)
- ・人類の進化を示すカルメル山の遺跡：ナハル・メアロット／ワディ・エルムガーラ溪谷の洞窟群 (2012, 3,5)
- ・洞窟の地の小宇宙としてのユダヤ低地のマレシャとベイト・グブリンの洞窟群 (2014, 5)

- ・ベート・シェアリムの墓地遺跡：ユダヤ再興を示すランドマーク (2015, 2,3)

エルサレム (ヨルダン王国申請による登録)

1 件

- ・エルサレムの旧市街とその城壁群 (1981, 2,3,6) [危機]

ヨルダン・ハシェミット王国 (1975) 計 6 件

- ・ペトラ (1985, 1,3,4)
- ・アムラ城 (1985, 1,3,4)
- ・ウム・エル・ラサス (キャストロ・メファア) (2004, 1,4,6)
- ・ワディ・ラム保護地域 (複合2011, 3,5,7)
- ・洗礼の地「ヨルダン川対岸のベタニア」(アル・マグタス) (2015, 3,6)
- ・サルトー寛容と歓待の都市 (2021, 2,3)

パレスティナ (2011) 計 3 件

- ・イエス生誕の地：ベツレヘムの聖誕教会と巡礼路 (2012, 4,6) [2017危機解除]
- ・パレスティナ：オリーブとワインの地ーエルサレム南部バティールの文化的景観 (2014, 4,5) [危機]
- ・ヘブロン／アル・ハリルの旧市街 (2017, 2,4,6) [危機]

レバノン共和国 (1983) 計 5 件

- ・アンジャル (1984, 3,4)
- ・パールベック (1984, 1, 4)
- ・ビブロス (1984, 3,4,6)
- ・ティール (1984, 3,6)
- ・カディーシャ溪谷 (聖なる谷) と神の杉の森 (ホルシュ・アルツ・エル・ラーブ) (1998, 3,4)

シリア・アラブ共和国 (1975) 計6件

- ・古都ダマスクス (1979, 1,2,3,4,6) [危機]
- ・古代都市ボスラ (1980, 1,3,6) [危機]
- ・パルミラの遺跡 (1980, 1,2,4) [危機]
- ・古都アレppo (1986, 3,4) [危機]
- ・クラック・デ・シュヴァリエとサラディン城 (2006, 2,4) [危機]
- ・シリア北部の古代村落群 (2011, 3,4,5) [危機]

トルコ共和国 (1983) 計19件

- ・ギョレメ国立公園とカッパドキアの岩窟群 (複合1985, 1,2,5,7)
- ・ディヴリーイの大モスクと病院 (1985, 1,4)
- ・イスタンブール歴史地域 (1985, 1,2,3,4)
- ・ハットゥシャ：ヒッタイトの首都 (1986, 1,2,3,4)
- ・ネムрут・ダー (1987, 1,3,4)
- ・ヒエラポリスーパムッカレ (複合1988, 3,4,7)

- ・クサントスーレートン (1988, 2,3)
- ・サフランボル市街 (1994, 2, 4,5)
- ・トロイの古代遺跡 (1998, 2,3,6)
- ・セリミエ・モスクと複合施設群 (2011, 1,4)
- ・チャタルホユックの新石器時代遺跡 (2012, 3,4)
- ・ブルサとジュマルクズック：オスマン帝国発祥の地 (2014, 1,2,4,6)
- ・ベルガモンとその重層的な文化的景観 (2014, 1,2,3,4,6)
- ・ディヤルバクル城塞とエヴセル庭園の文化的景観 (2014, 4)
- ・エフェソス (2015, 3,4,6)
- ・アニの古代遺跡 (2016, 2,3,4)
- ・アフロディシアス (2017, 2,3,4,6)
- ・ギョベクリ・テペ (2018, 1,2,4)
- ・アルスラン・テペの遺丘 (2021, 3)

以上、総数は81件を数える。この数が世界の歴史を顧みて多いとみるかあるいは少ないか、その判定は措くとして、文明発祥の地を擁するアラブ4か国とイラン、トルコの世界遺産条約加盟が、日本の1992年、中国の1985年に比べておしなべて早く、この条約にかけける期待がいかに大きかったかを物語る。単なる一覧表ではあるが、それらの登録の歴史を丁寧にみると、緊張感の絶えないこの地域の現代史の一面が透けて見える。

2-1. エルサレムとパレスティナ問題

そんな中で、国にも地域にもあたらないエルサレムが特別扱いされている理由には説明が必要だろう。3大宗教の聖地であり世界遺産第1号とされたとしても誰も異を唱えないであろう歴史的な都市エルサレムは、イスラエル建国後、長くパレスティナ紛争の只中にあり、誇りとする歴史的旧市街は、国際社会ではヨルダン王国領内西岸地域に立地するとの理解が普通であった。そのうえ、世界遺産の登録申請は必ずしも保有国とは限らないという原則があったため、1982年、エルサレムの城壁内がヨルダンの登録申請により世界遺産となった。1981年にイコモスが提出した推薦文には、「エルサレムを世界遺産一覧表に記載しようという要請が頻繁かつ明確であることからすれば、1980年以前に文化遺産として提案されなかったのは驚きだ」と冒頭に記されている。⁶⁾

しかし、1993年のオスロ合意を受けてパレスティナ自治政府が樹立されたことにより混迷の度は

再び深まることになる。登録の時点で、エルサレムはその主権自体が怪しく、まして市中にあふれる歴史的遺産の保護管理の責任など全く保証の限りではなかったため、ユネスコ及び締約国（条約加盟国）は直ちにその翌年、この世界遺産都市を「危機遺産」の一覧表に登載することに躊躇しなかった。その後、ユネスコ世界遺産委員会は、開催するたびに、実質の統治権を有するイスラエルに対してその非合法性を訴えるが、聞き入れてもらえるわけもなく、同じような決議を20回も繰り返しつつ、2021年現在、エルサレムは危機遺産であり続けている。

次いでパレスティナをめぐる世界遺産上の問題にも触れておく。先のオスロ合意が進展しないまま、アラブ諸国に支えられて2011年、パレスティナ自治政府はユネスコでの締約国待遇を勝ちとり、併せて世界遺産条約にも加盟を果たした。国際連合でオブザーバー国家として承認される前の年のことである。⁷⁾ 翌年さっそく、パレスティナ最初の世界遺産として「ベツレヘムの聖誕教会とその巡礼路」を自治政府は推薦した。まだ遺産保護の体制が危うい中、「条約履行のための作業指針」⁸⁾で認められた「緊急事態」を根拠に、特別の配慮を求めるものだった。しかしその審査にあたったユネスコの諮問機関イコモスは、遺産範囲すら明確でなかったため締約国の主張を退け、「世界遺産一覧表に直ちに記載する見解を支持せず、時間をかけて条件を整えよ」との勧告を2012年の世界遺産委員会に提案した。⁹⁾ しかしこの勧告はパレスティナを支持する国々によってあっさりと覆され、ここにパレスティナ第1号の世界遺産が誕生した。

参考までに、2007年、日本の石見銀山遺跡が世界遺産に登録される過程でも、イコモスの勧告が覆されたことがあった。ただその頃はほとんど前例がないと世間を驚かせたものだったが、このパレスティナの事例が扱われる頃から、世界遺産委員会でイコモス勧告が軽視される傾向が顕著となり、審査過程全体のプロセスを見直そうという機運が一気に盛り上がった。2019年の委員会を例にとれば、文化遺産と複合遺産両部門で計29件の申請が受け付けられ、うち9件はイコモスから記載勧告を受けられなかったのだが、そのうち6件は委員会の議場で登録を勝ちとっている。こうした状況から、世界遺産候補を推薦した国とユネスコ世界センターないしイコモス本部との対話、さらにはこれからの登録を希望する提案国とイコモスとの間の対話が、いま奨励されるようになっていく。

パレスティナのユネスコ加盟の影響はそれだけにはとどまらない。その動きは、反目するイスラエルやその背後にいる米国の強い反発を買った。米国はその国内法に照らし、ユネスコに対してまず拠出金を停止し、2018年末をもってユネスコ加盟国としての立場を脱するに至った。イスラエルも追随した。ただ両国とも世界遺産条約締約国の地位は放棄しておらず、両国の世界遺産の状況に変わりはない。とはいえユネスコも世界遺産委員会も、財政困窮の度を著しく悪化させることになり、いずれその活動が立ち行かなくなることが懸念されている。その煽りを受け、2019年の委員会では、それまで無償であった世界遺産候補の推薦に当たっては、先進当事国に対して22000ドル以上44000ドル程度までの負担金を課することが決議されたのだった。¹⁰⁾

2-2. 「危機に瀕した遺産」から見えるもの

登録された世界遺産のなかには、その価値を維持することが困難な場合も少なくない。原因は自然災害であったり武力紛争であったり様々だが、世界遺産条約に「危機に瀕した遺産」が規定される所以である。これに関して条約第11条第4項は次のように定める。

「世界遺産委員会は、事情により必要とされる場合には、世界遺産一覧表に記載されている物件であって、保存のために大規模な作業が必要とされ、かつ、この条約に基づいて援助が要請されているものの一覧表を『危険に瀕した in danger 世界遺産一覧表』の表題の下に作成し、常時最新のものとし及び公表する」。

さらに加えてその危機の要因として、「大規模な公共事業若しくは民間事業又は急激な都市開発事業若しくは観光開発事業」となると「武力紛争の発生及びそのおそれ」「大規模な災害及び異変」なども条文中に列挙する。残念なことに、人類史上かけがえのない文明遺産が広域かつ稠密に分布し、かつそれらが尋常ではない保存状況に置かれていて、危機遺産の事例集となっている地域がイラクとシリア、両アラブ共和国に広がる。シリアの事例から見てみよう。

1975年に早々と世界遺産条約に加盟したシリアは、2011年までに6件の世界文化遺産を有することになった。6件それぞれに認められた顕著な普遍的価値OUVの時代背景を古い順に振り返ると、まずアレppoは紀元前の遺跡の上にイスラームの城郭と市街が重なる（図1）。ダマスカスも下層に遺跡が横たわるといえるが基本はローマ時代の骨格にイスラーム初期文化とオスマン朝期の市街が重層する（図2）。パルミラとボスラはローマ帝国の一翼を担った都市遺跡（図3、4）。初期キリスト教ないしビザンティン帝国の時代の輝きを北部村落群に認め、中世十字軍時代に東西が凌ぎ合いを繰り広げたその痕跡がクラック・デ・シュヴァリエとサラディン城に明確に示される（図5、6）。世界遺産の遺跡を通してシリアという国と地域の歴史を私たちは認知する。とはいえ、シリアの世界遺産登録は2011年の北部古代村落群を最後に途絶えている。これからの世界遺産を示唆する「暫定リストTentative List」には、古代文明期の著名な遺跡が数多く挙がっているにもかかわらず、である。¹¹⁾ 登録が進まない代わりに、2013年、上記6つの世界遺産はすべて同時に危機遺産に登録されたのである。

その年の世界遺産委員会の決議事項の一つは、次のようにその事情を述べている。

「世界遺産委員会は、衝突状況が国土に蔓延し人命が損なわれることを悲しみ／6つの遺産の保全状況報告を考慮し、かつ惹き起こされた損害とこれら資産を襲う脅威に強い懸念を表明し／OUVの保全を保証する適正な条件はもはや望みえず、かつ明確なそして潜在的な危機に曝されていることを考慮し／6つの資産すべてを危機遺産リストに掲載することを決議する。」¹²⁾

いわゆる「アラブの春」の潮流がいったんはシリアにも及んだものの、それは反政府勢力の武力蜂起へとつながり、2011年以降は北部を中心に内戦状態が国土に蔓延する。アレppoの旧市街は廃墟と化し、反政府軍の拠点となったクラック・デ・シュヴァリエ城を政府軍が容赦なく空爆する映像が伝えられた。両勢力の武力抗争が泥沼化する中、こんどはシリア北東部に異常なテロリスト集団イスラーム国が跋扈し始める。2015年には、あろうことか、パルミラ遺跡の主役をなしていたパー

ルシャミン神殿、パール神殿、そして凱旋門が相次いで爆破された。いまではひと頃ほどの大きな衝突は伝えられていないが、内政の安定と治安の回復にはまだ時間を要するようで、6件の世界遺産が危機遺産状態を脱する見通しはまだ立っていない。

隣国イラクの危機遺産のありようはまた別の事情を反映する。イラクの世界遺産条約への加盟は、シリアよりなお早く、1974年のこと。しかし国内最初の世界遺産ハトラの登録は、10年以上も後の1985年のことだった。1980年から8年間続いた対イラン戦争の余波が国の文化財保護や調査に国力を傾ける余裕をなくさせたようだ。

その後20年近く、2003年、2番目の世界遺産登録を果たしたのは古代アッシリアの古都と称される北部の遺跡アッシュールだった。同時に危機遺産にも登録された。ティグリス川に面する遺跡から30km余下流でダム建設が進み、遺跡南部の裾がティグリスの水に洗われるという事態が差し迫ったから、というのが理由だった。¹³⁾ ダム建設を進めたサッダーム・フセイン政権が対米戦争で命運を尽きたのは同じ年のこと。その後国土は平和を取り戻すどころか治安の回復は遅々として進まず、2013年以降はイスラーム国勢力が北部を席卷する事態となり、アッシュールも彼らに占拠されたうえに修復されていた遺構が故意に破壊されたという。2021年の世界遺産委員会への報告によると、テロリストは撤退はしたいが、未だダム建設の計画は撤回されておらず、遺跡の回復は後回しにされているようで、危機遺産を脱する状況ではない。¹⁴⁾ イスラーム国の蛮行は上記ハトラにも及び、遺跡に残された彫像や壁体が小銃の標的となった。その結果、2015年、危機遺産リストに加えられることになり、未だ旧に復してはいない。

2007年に登録されたイスラーム初期の都市遺跡サーマッラーは、危機遺産リストへの登録と同時であった。サッダーム亡き後、国政は一向に安定せず、一時期武装したその残党たちが遺跡を陣地とし、その後も遺跡はイスラーム国勢力の前線基地にもなったことがその理由で、以後の状況が未だ締約国から報告されておらず、危機遺産除外の条件はまだ整っていない。¹⁵⁾

他にもイラクには危機遺産リストに載っていない世界遺産が3か所ある。うちクルド地域に位置するエルビルの城塞は、この地域が対米戦争後にバグダード政府によるコントロールから半ば自由になり、かつ内戦状況からも距離を置いていたことで登録が進んだ世界遺産である。他の2遺産は対米戦争後のシーア派政権下で治安の回復が比較的順調だった南イラクにあり、ようやくシュメール・バビロニア文明の中核に世界遺産のブランドが付与された点で喜ばしい。ただし、それぞれに保存管理の面から課題は深刻だ。2016年に登録されたアフワールのエリアは、4つの湖沼と3つの著名なシュメール文明の遺跡から成る複合遺産で、自然遺産としての観点からIUCN（国際自然遺産保護連合）は肯定的な評価だったが、文化遺産を審査するイコモスは、イラク政府が主張する湖沼と遺跡との関連性、すなわち湖沼の景観はかつてのシュメール諸都市の立地環境の残影とみなすという見解に疑義を呈し、登録延期を進言していた。ただ世界遺産委員会ではイラク政府を支持する委員国の声が議場を圧倒し、登録が議決されたという経緯がある。¹⁶⁾ 2003年の米軍侵攻時以来荒廃したと伝えられるバビロンの遺跡は、2019年の登録時、イコモスから同時に危機遺産リストへの登録も勧められたがイラク政府がこれを断った。戦争以前から、遺跡内に20世紀の集落が複数

あることや、サッダーム時代には大統領宮殿を建設するために人口の丘がいくつも構築されるとい
う、古代都市とはかけ離れた状況だった。イコモスはこれらをバビロンの文化的価値を損なう脅威
とみなしており、今後に大きな懸念を残している。¹⁷⁾

筆者が所属していたイラク古代文化研究所の活動地域はまさに上記2か国を中心としており、正
常な調査活動が可能となる環境を一日も早く取り戻してもらいたいと祈念して止まない。

3. 西アジアの世界遺産を年表にする

さて、文化遺産は世界遺産に限らず、地域の歴史の中から誕生し、その証となっている。それを
制度として確立し今や国際社会にしっかり定着している世界遺産条約は、「人類全体のための世界
の遺産の一部として保存する必要があるものがあることを考慮し」「文化遺産及び自然遺産の保護
に参加することが国際社会全体の任務である」（以上、条約前文より）とその理念を掲げる一方、
各締約国は自らの威信をかけて毎年の世界遺産委員会の議場を沸かせている。駆け引きや裏交渉な
どいろいろあると聞くが、それはそれで平和裏に行われる一種お国自慢の祭典とみなすなら、目く
じらを立てるほどのことではないだろう。結果としてそこから生まれた世界遺産一覧表には多種多
様な遺産が登録され、西アジアの国と地域に限っても、多くの文化遺産と複合遺産が展開する。試
みにこれらを時間軸で配置してみると、どのような光景が映し出されるであろうか。本節の主題で
ある。

まず、上記の国・地域別遺産の群れを、わずかな自然遺産を除いて年表形式に配列するところか
ら始める（表2）。ある程度の地域性を反映させるため、横軸にはアラブ4か国を地理上「シリア・
レバノン」と「イラク・ヨルダン」にまとめて区別したほか、パレスティナはイスラエルと括るこ
とにした。トルコとイランはそれぞれ民族も異なる西アジアの大国であり、単独に扱う。

縦軸には西アジアの歴史を5つの文化史上の時代観（旧石器・新石器文化／銅石器・青銅器文
化・メソポタミア文明／ペルシア帝国・ギリシア・ローマ／初期キリスト教・イスラームの拡散／
オスマン帝国・近世以降）によって区分して遺産を配した。それぞれの遺産・遺跡には長い存続期
間を有する例が少なくなく、一つの遺産が複数の文化期にまたがることも珍しくないし、下に向か
うほど時代は新しくなるが、各遺産の前後関係を正確に反映するものでもない。

また、表中には遺産ごとに、それぞれの登録年次とその遺産がどういう評価から登録されたかを
端的に示す「顕著な普遍的価値を示す評価基準」明示した。¹⁸⁾ 以下に紹介する各遺産概要の叙述は、
とくに断らない限り、ユネスコの世界遺産ウェブサイト上に掲載された遺産ごとの叙述Description
による。

表2. 地域・文化期別西アジアの主要世界文化遺産
(2021年11月筆者作成。() 内は登録年と評価基準)*

文化期区分	イラク・ヨルダン	シリア・レバノン	イスラエル・パレスティナ	イラン	トルコ
旧石器・新石器文化	ワディ・ラム (2011, 3,5,7)		カルメル山遺跡 (2012, 3,5)		ギョベクリ・テペ (2018, 1,2,4) チャタルホユック (2012, 3,4)
銅石器・青銅器文化 メソポタミア文明	アフワール (2016, 3,5,9,10) アッシュール (2003, 3,4) バビロン (2019, 3,6)	ビブロス (1984, 3,4,6)	聖書時代の遺丘群 (2005, 2,3,4,6)	シャフレ・ソフテ (2014, 2,3,4) スーサ (2015, 1,2,3,4) チョガ・ザンビール (1979, 3,4)	アルスラン・テペ (2021, 3) ハットゥシヤ (1986, 1,2,3,4) トロイ (1998, 2,3,6)
ペルシア帝国 ギリシア・ローマ	ハトラ (1985, 2,3,4,6) ペトラ (1985, 1,3,4)	ティール (1984, 3,6) ボスラ (1980, 1,3,6) パルミラ (1980, 1,2,4) パルベック (1984, 1, 4)	ネゲブ砂漠都市 (2005, 3,5) マサダ (2001, 3,4,6) ペート・シェアリム 墓地遺跡 (2015, 2,3) マレシャとペイト・ グブリン洞窟群 (2014, 5)	バサルガダエ (2004, 1,2,3,4) ベルセボリス (1979, 1,3,6) ピソトゥーン (2006, 2,3) サーサーン朝考古景観 (2018, 2,3,5) タハテ・スレマーン (2003,1,2,3,4,6) シュシュタル (2009, 1,2,5)	ネムルット・ダー (1987, 1,3,4) ディヤルバクル (2014, 4) ヒエラポリス (1988, 3,4,7) ベルガモン (2014, 2,3,4,6) エフェソス (2015, 3,4,6) クサントス・レートン (1988, 2,3) アフロディシアス (2017, 2,3,4,6)
初期キリスト教 イスラームの拡散	ウム・エル・ラサス (2004, 1,4,6) 洗礼地ベタニア (2015, 3,6) アムラ城 (1985, 1,3,4) サーマッラー (2007, 2,3,4)	シリア北部村落群 (2011, 3,4,5) カディーシャ渓谷 (1998, 3,4) ダマスクス (1979, 2,3,4,6) アンジャル (1984, 3,4) クラック・デ・シュ ヴァリエ (2006, 2,4)	ベツレヘム (2012, 4,6) エルサレム (1981, 2,3,6) ヘブロン (2017, 2,4,6) アッコ旧市街 (2001, 2,3,5)	バム (2004, 2,3,4,5) ソルターニーエ (2005, 2,3,4) アルメニア修道院群 (2008, 2,3,6) イスファハンのジャー メ・モスク (2012, 2) ゴンパデ・カーブース (2012, 1,2,3,4)	アニ (2016, 2,3,4) カッパドキア (1985, 1,2,5,7)
オスマン帝国 近世以降	エルビル城塞 (2014, 4) サルト (2021, 2,3)	アレppo (1986, 3,4)	テル・アビーブ (2003, 2,4) バハイ聖地群 (2008, 3,6) バティールの景観 (2014, 4,5)	カナート (2016, 3,4) ペルシア庭園 (2011, 1,2,3,4,6) イスファハンの広場 (1979, 1,5,6) アルダビール (2010, 1,2,4) タブリーズ (2010, 2,3,4) ヤズド (2017, 3,5) ゴレスターン宮殿 (2013, 2,3,4) メイマンド (2015, 1,2,3,4) ハウラマン (2021, 3,5) イラン横断鉄道 (2021, 2,4)	イスタンブール (1985, 1,2,3,4) セリミエ・モスク (2011, 1,4) ディヴリーイ (1985, 1,4) ブルサ (2014, 1,2,4,6) サフランボル (1994, 2, 4,5)

*表中の世界遺産名称はここだけの略称。フルタイトルは先の一覧を参照のこと。
各文化期の遺産の順序は筆者によるおおよその年代観に基づく。

3-1. 旧石器・新石器文化

イスラエル北部のカルメル山は、その麓に4つの旧石器時代洞窟が知られ、周辺の遺跡群を含めると、50万年前にさかのぼる旧石器前期のアシュール文化から旧石器終末のナトゥーフ文化までの様相を伝える。加えて旧石器時代中期に活躍したネアンデルタール人が現生人類と共存していたらしい痕跡を示す点でもきわめて重要な遺跡群である。アフリカに始まる現生人類が最初に拡散の緒に就いた地方として、西アジアに展開する人類史はここから始めるのが妥当であろう。ただ少なくとも中期旧石器文化（およそ20万年～5万年前）をあとづける遺跡は、「最初に花を愛でた人々」と紹介されるネアンデルタール人の痕跡をとどめたシャニダール洞窟のあるイラク北部からさらに東ヘイラン高原に至る各地に知られており、西アジア旧石器文化の展開をカルメル山の世界遺産だけに負わせるわけにはいかない。はっきりと遺跡範囲を判別でき、考古学上の評価が定まる遺跡が現れさえすれば、この旧石器時代という領域の世界遺産の要件を満たす遺跡がほかにも特定される日が来るにちがいない。政情不安定な現状がつづく限り、簡単には見出せそうにないのも事実であるが。

表中、この文化期にはほかに3件の遺産が含まれる。うちヨルダンのワディ・ラム保護地域については、深く長大な自然地形であるワディに沿って、さまざまな人類の足跡が認められ、景観全体が複合遺産と認定されたもので、12000年前くらいまで遡りうる岩画などをふくむものの、いまのところ人類史的な観点から個々の構成資産に特筆するものは見当たらない。

他方、トルコ領内で登録された二つの遺跡は、それぞれが西アジア先史世界のイメージと学術を一新させた考古遺産である。チャタルホユックの方は1960年代の発掘成果である。南アナトリアのコンヤ平原に並ぶ遺丘には、紀元前7400年頃に遡る新石器文化の堆積があり、アナトリア最初期の定住農耕村落の発達過程を示す稀有な遺跡と評される。密集した住居群の間に街路はなく、家屋は屋根から出入りする形式で、これが新石器時代の住居形式の典型とみなされた。保存状態も良好で、2ヵ所に大屋根をかけることによって発掘時の状態を保っている（図7）。

もう一方のギョベクリ・テペの発掘報告はさらに衝撃的であった。ティグリス、ユーフラテス両河の最上流域に立地するこの遺跡は、旧石器段階を脱したばかりの無土器新石器文化の時代とみなされる紀元前9600年頃にまで遡るというのに、記念碑的な円形と長方形の洗練された構造を複数提供する。T字型に加工した柱に動物イメージまで刻み込んだ5mを超える巨石を使用する一方、日常生活の痕跡をとどめないのが、これらのモニュメントは共同の儀式に使用されたと考えてよさそうである。¹⁹⁾ 評価基準(i)の採用はその逞しい表現力を評価したものと思われる。この近傍30kmほど離れたカラハンという名の遺跡でやや遅れて見つかった同種の遺構群はさらに規模が大きいというから驚きは増すばかりだ。2018年、ギョベクリ・テペは世界遺産一覧表に登録された。世界遺産のルールには同種の遺産は代表する1件のみを登録するという不文律があるうえに、トルコ共和国が用意している暫定リストには80を超えるエントリーがあるため、今後カラハンテペがどのように扱われるか、興味深く見守りたい。

3-2. 銅石器・青銅器文化・メソポタミア文明

ティグリス、ユーフラテスの流域に農耕牧畜が人口の増大をもたらし、そして都市文明が生成発展し、その影響が周辺地域に及んだ時代である。「南イラクのアフワール：生物の避難所と古代メソポタミア都市景観の残影」と命名された世界遺産には、東寄りに自然遺産としての湖沼があり、西方にシュメール文明を代表する3つの都市遺跡、ウルク、ウル、エリドゥを包摂する（図8）。紀元前5000年前後から神殿を伴う集落の発達があり、今でこそその一帯は沙漠化しているものの、前4千年紀代には東方の湖沼地帯と同様な湿原が広がる環境下でそれぞれ都市化が進んだ。東方に残る湖沼地帯にかつての都市景観の残影を認めるとともに3都市遺跡が今の湖沼と一体的に扱われ、同時に世界遺産となった。

北メソポタミアではシュメール文明の影響がまずアッシュールに及び、後のアッシリア帝国の土台としての都市国家の形成が進んだ（図9）。ティグリス川中流域に位置し、その建設はシュメール人の手による。西アジアの通商路として発展し、紀元前3千年紀末からアッシリア王国、紀元前14～同9世紀にはアッシリア帝国の首都になり、アッシリアの最高神を戴く宗教的拠点としても繁栄した。紀元前612年にメディア人によって破壊されたが、紀元後1～2世紀のパルティア時代に再興した。

都市化の様相はメソポタミア周辺域でも見られるようになる。レバント地方、海に面するビブロスは、前3000年頃から地中海で活躍したフェニキア人の交易で栄えた（図10）。新石器時代の住居、フェニキア王の墓所、ローマ時代の劇場跡、エジプトとの交易を物語るオベリスク神殿跡などが、この都市の長く、多彩な歴史を物語る。アルファベットの起源とされるフェニキア文字はここを拠点として広まったこともビブロスの歴史的評価を高めている。パレスティナには、旧石器時代末期から集落形成が進んだ世界最古の都市と形容されるイエリコの遺跡があるが、まだ暫定リストにとどまっている。早くにこの一覧表に登場できるよう、自治政府がしっかりと管理できる環境が望まれる。

イランでも、ザグロス山脈の麓、メソポタミアに隣接するスシアナ平原に世界遺産の遺跡スーサが位置する。紀元前5千年紀後半以降農耕文化が進み、シュメールの地と近接しながらも異なる言語を有するエラム民族の王統が代々ここを都とした。アケメネス朝帝国のダレイオス1世はペルセポリスに先んじてここに多柱式の王宮を造営し、特有の儀礼用建築の典型をもたらした（図11）。遺跡は350ヘクタールに及び、多様な文化が開花しここに積層したことが評価の軸となっている。

前13世紀のエラム王は、メソポタミア都市を模して新都の建設を断行したことで知られる。その遺跡がチョガ・ザンビールで、中心には、メソポタミアに残るいずれの遺構よりも平面規模の大きい巨大な聖塔（ジックラト）が今もそびえる（図12）。20世紀まで報じられることのなかった遺跡である。日乾煉瓦と焼成煉瓦を巧みに使いこなし聖塔や地下式王墓にみられるヴォールト構造を含む組積技術は、その良好な保存状況とともに特筆されてよい。

前3千年紀から2千年紀にかけてのアナトリアには、それぞれ特色のある3つの世界遺産遺跡を認める。ユーフラテス上流域のマラティヤ平原に立地するアルスラン・テペは、5ヘクタールにも

満たない遺丘だが、後期銅石器時代から初期青銅器時代に宮殿と王墓群からなる最も顕著な遺構が明らかになっており、メソポタミアの初期ウルク文化との関係が注目される。2021年に登録された世界遺産だが、イコモスから保存管理の面が十全ではないとの注文がついている。

前16世紀のアナトリア中央には、それまでのアッシリアへの従属状況を脱してハットゥシャを首都とするヒッタイト人の王国が勃興する（図13）。標高約1000mのアナトリア高原に造営された城塞都市は8kmにも及ぶ城壁をめぐらせて防御を固めた。20世紀初頭からの発掘で王宮、神殿、城塞のほか約2万枚の粘土板文書などが確認され、そのオーセンティシティはゆるぎがない。ヒッタイトは史上初めて鉄器を利用した民族としても歴史的意義は絶大である。

他方アナトリア西端には古代ギリシアの伝説が語るトロイの遺跡がある。1870年に始まるシュリーマンの発掘によってその全容が明らかになった。西アジアと黎明期の地中海世界との最初のコンタクトを示す具体的な証拠である。イリアードが語るミケーネ戦士によるトロイ包囲は、第7層時代に遡るとされ、のちに世界中の芸術家の精神を鼓舞するモチーフとなった。顕著な普遍的価値のある叙事詩と密接な関係ありとして評価基準（vi）が適用された例でもある。

メソポタミア文明最終局面の王権が所在したのはバビロンであった。内外2重の城壁に囲まれた新バビロニア帝国（前629–539）首都の跡を世界遺産の範囲とする。内外の城壁のほか、城門、広大な王宮群、複数の神殿などの遺構は、古代世界で最も影響力を有した国家の貴重な物証である（図14）。ハンムラビやネブカドネザルなど、幾世代にもわたる帝国の首都であったが、この新バビロニア時代に創造的表現は最高レベルに達した。「バベルの塔」の逸話や、世界七不思議の一つである伝説の「空中庭園」は、後代の芸術や宗教面で強いインパクトを与えたのだった。

3-3. ペルシア帝国およびギリシア・ローマ

前6世紀、バビロンを制圧し、アケメネス朝ペルシア王キュロスが西アジアの覇権を担う。現代イラン人のルーツといえるイラン南部ファールス地方、パサルガダエがその首都。その宮殿や庭園、キュロスの霊廟（図15）、丘の上の砦や王室の守衛詰所群、公開堂などを含む160haの地域にある建造物は、アケメネス朝の芸術・建築の初期の特徴を示す。王朝の版図は東地中海やエジプトからインダス河まで広がり、幾多の民族を受け入れ、多様な文化を尊重し、融合させた西アジアで始めての帝国であった。

やはりファールス地方に建設されたアケメネス王朝の都ベルセポリスは、ペルシア史上最大の都城であろう。紀元前520年ごろダイリウス大王の時代に宮殿などの建築が始まった（図16）。新年祭には「諸王の王」と称されたペルシアの大王の元に諸侯が集い、繰り広げられた儀式的模様が、正面階段の壁などに独特のレリーフで描かれている。イラン西部、メソポタミアと結ぶ古代の交易路に沿いにあるビソトゥーンの切り立った崖面には、ダレイオス1世の浅浮彫や、その下方に楔形文字で記された碑文が刻まれた。碑文には、王自身の戦闘模様が、エラム語・バビロニア語・古代ペルシア語の3言語で1200行にわたって記され、アケメネス朝時代唯一の歴史的文書であると同時に、楔形文字の解明に大いに役立った点でも資料的価値が高い。

創造的才能の傑作として価値が認められたシューシュタルの歴史的水利施設は、紀元前5世紀のダリウス1世の時代に造られたという。カールーン川の水を引いた2つの主要運河を含み、そのひとつギャルギャル運河は、製粉場に通じるトンネルを抜け、水は滝のように下流に向かって南部の平野4万ヘクタールを潤す(図17)。

アケメネス朝を破ってその広大な版図を手に入れたアレクサンドロスは各地に自らの名を冠した都市の建設を多数試みた。それらの中で世界遺産に登録された例はないが、同時代すなわちヘレニズム期に栄えたいくつかの都市には登録された遺跡がある。ヨルダンではナバティア人の都ペトラ。ただ「宝物庫」と形容される遺構など岩窟墓の多くはローマ時代の作例である(図18)。やはりローマ時代の遺構が顕著なレバノンのティール(ティロス)は、フェニキア人の拠点だったがアレクサンドロスが島を陸に繋いで攻め滅ぼしたという伝承で知られる(図19)。イスラエルにある200以上のテル(遺丘)のうち、メギッド、ハツォール及びベール・シェーバは、聖書に関連する重要な都市遺跡を含み、権力の集中や豊かな農耕活動、重要交易路が機能していたことを物語る。

トルコのエーゲ海沿岸に立地するペルガモン、エファソス両遺跡、リキア地方のクサントスとレートーン、内陸のアフロディシアスなど、ヘレニズムからローマ時代にかけて栄えた都市の遺跡である。ペルガモンは紀元前3世紀に、ギリシア人のアッタロス朝の首都として建設され、エーゲ海域という古代世界の中心を利して発展し、ヘレニズム、ローマ、ビザンティン、オスマン帝国の各文化がここで融合した。ローマ時代由来の円形闘技場、大水道、神殿などの顕著な遺構も見られるが、ヘレニズム期の劇場や列柱廊、教育施設のギムナジウム、大祭壇などの建築が急峻な自然地形の中に見事にフィットした稀有な例としての評価が高い(図20)。

エフェソスの方はローマ時代の港湾都市として名高いが、都市の建設は前4世紀。アルテミス信仰を背景に古代世界有数の巡礼地として発展し、ローマ帝国ではキリスト教の伝播に重要な役割を果たした。また哲学と医学の中心地で、セルスス図書館、大劇場、ハドリアヌス神殿など、その威容を示す遺構が発掘されている(図21)。ペルガモンは文化芸術の規範がここで誕生したとして、またエフェソスはキリスト教拡散の拠点として、いずれも世界遺産評価基準(vi)が採用されている点、特筆したい。クサントスでは石棺や石窟が集中するネクロポリスの光景が目を引く。

ヘレニズムを引き継いだ古代ローマの時代、その文化はアナトリアからシリア、レバント方面を席卷する。観光地としても人気のヒエラポリス―パムツカレは、内陸トルコの温泉地で、前2世紀にペルガモン王国の軍団居留地エラポリスが建設された。台地上部に湧き出る温泉が創り出した特有の温泉棚は古代ローマ皇帝にも愛でられ、劇場など多くのローマ建築の遺構が当地に残っている。

レバント地方ではまずパールベックの神域に注目したい。ヘリオポリス(太陽の都)と呼ばれたフェニキア人の都市で、ローマ時代に建設されたジュピター神殿は帝国最大級の規模を誇り、隣接するバックス神殿は規模のみならず、その優れた保存状況はローマ時代の神殿のうちでも卓越している(図22)。

シリアやヨルダン領内にもローマ都市に特有の列柱道路を軸とする都市計建設が相次ぐ。古代都市ボスラはローマ帝国アラビア州の州都だった。都城壁の内には、2世紀代創建の巨大なローマ劇

場、初期キリスト教期の遺構、複数のモスクなどが現代の市域内で錯綜する（図4参照）。他方、ローマ帝国の進出の過程で旧来の勢力との抗いも頻繁に生じた。死海西岸の孤立した台地にあったマサダの遺跡では、壁画で飾られたヘロデ王（紀元前37～同4年）の離宮と関連施設が発見され、紀元66年の第1回対ローマ反乱に際しての拠点だったことが知られる。1000人近いユダヤ人が自己犠牲をいとわず、73年まで堅守したという。

シリア砂漠には、日本の考古学者ともゆかりの深い世界遺産、パルミラの遺跡がある。紀元後1～3世紀の間、東西文化の接点として栄えた隊商都市である。ゼノビア女王が激しくローマに反抗して都市は滅んだが、18世紀以降の調査によって、列柱道路をはじめ、広大な都市の全体像が明らかにされた（図3参照）。ここまで内陸に入ると、市街の外観はローマ的でも、そこで生産された彫像などはきわめてアジア的なしは同時代の東方パルティア的な造形要素を認めうる。先に記したように、顕著な遺構がイスラーム国集団によって破壊された光景は残念の極みである。

シリア砂漠からユーフラテス川に至る一帯が、およそローマとその東方地域との緩衝地帯であった。西側はローマ帝国が4世紀に東ローマすなわちビザンティン帝国へと変遷し、東側はセレウコス朝の版図を継いだアルサケス朝パルティアの統治から、3世紀代にサーサーン朝ペルシアが覇権を奪取する。イラク西北部ハトラの遺跡は、紀元後2～3世紀、ローマ軍の侵攻に耐えながらも商業、軍事、宗教の中心地として繁栄したアラブ人の都市国家である。市域を囲繞する切り石を用いた2重の城壁は円形をなす。城壁で囲まれた町の中央にはローマ風の周柱式神殿を含む巨大な聖域が築かれ、アーチ型の開口を正面に見せるイーワーン式の建築が、イスラームの時代の建築をつよく予感させる（図23）。メソポタミアでは珍しく、主要な建築がみな切石の組積造だったため遺構の遺存具合も良好で、かつ信頼に足る復元も可能だったことから、イラクで第1号の世界遺産となった。ただここで扱う国々のなかで、パルティア時代を代表して世界遺産となった都市あるいはモニュメントは、ほかにない。その意味では、先に記したアッシュールのパルティア時代の遺構は、イーワーンを多用した当時の王宮建築をほぼ完全に復元することが可能という点から、貴重な遺産といえることができる。²⁰⁾

パルティアに続いてローマ帝国と対峙したサーサーン朝は、ファールス地方にその基盤を置き、イスラームが到来する7世紀までの間にいくつもの王都や新都市の建設にあたった。それらのうち、3か所の帝都、フィールザーバード、ビーシャープール、サルヴィスタンを「ファールス地方のサーサーン朝考古景観」と一括りにして、2018年、世界遺産登録を果たしている（図24）。その折の推薦国イランは「本資産の要塞、宮殿、レリーフ、都市プランは、224年から658年まで地域一帯に広がっていたサーサーン帝国の初期と末期の瞬間を伝える。サーサーン朝の始祖アルダシール1世の軍事本部であり最初の首都の遺跡、彼の後継者であるシャープール1世の都市遺跡、7世紀から8世紀にかけてサーサーン朝からイスラーム時代が変わっていく様子を示す」と主張した。最終的に世界遺産委員会はこれを受け入れたが、勧告にあたったイコモスが、サルヴィスタンは末期の様子を伝える、という点について疑念を示したことには留意する必要がある。また2003年に登録を果たしたタハテ・スレマーンは、「ソロモンの王座」を意味し、イラン北西部の火山帯溪谷に

位置する遺跡で、アナヒタ神殿とともにサーサーン朝末期（6～7世紀）の重要なゾロアスター教（拝火教）の聖域であった。²¹⁾

ここまで、世界遺産一覧表を通じて地域の歴史と文化をどのように俯瞰できるか、試みた。表2に示した5つに区分した文化期について、第4の「初期キリスト教／イスラームの拡散」、第5の「オスマン帝国／近世以降」については、誌面と許された時間の関係で筆が及ばなかった。筆者の非力をご容赦いただくしかない。次なる機会があれば続編を試みたい。

しかしその結果、世界遺産というツールを用いれば、極めて簡便に、しかもユネスコという一定程度の信用保証を添付した、おおむね最新の地域情報を得ることができるということを実感することができた。当然のことだが、世界遺産から得られる情報は国ごとに、また時代ごとに濃淡差があり、埋めるべき空白が最後まで残ってしまう地域や時代があったことは否めない。他方、より深い関心を覚えたならば、それぞれの推薦文書nomination fileを探索することにより、信頼に足る図面や写真の類、文献情報も満載である。図書館やネットでは得られないような未公表情報にも接することがある。世界遺産一覧表ないしはそれを掲載するユネスコ世界遺産センターの提供するウェブサイトの活用法はまだまだ広がりそうである。

目下の国情によって、このような情報発信が滞ってしまう国もあるが、今回対象とした7か国と1地域それぞれが今後の世界遺産登録に向けての暫定リストを確かめると、イランでは60件超、トルコでは80件を超える候補遺産が列挙されている。他の国々でも20件前後が控えている。ユネスコや審査機関の処理能力や信頼性に左右される点はあるが、登録制度を根幹に据えながらも国際協力を訴える世界遺産条約の有用性は当然損なわれることはないと思われる。国家間相互に民族の歴史と文化の多様性を認識することこそ人類の平和共存の基礎であるというユネスコの理念を改めて思い起こしたいものである。

4. 結び—これからどうなる世界遺産制度

以上、西アジアの国々のわずかな世界遺産事例を縦覧しただけでも、保有国の側からは歴史と文化の発信、私たち外からはそうした情報に基づく異文化の深層への理解、といった世界遺産の基本的な仕組みと効用を評価することができたのではないか。加えて危機遺産という見方を導入することで、いやでも今日的な国際情勢、あるいは地政学の現実を世界に訴える効果を発揮するという側面を、世界遺産条約は備えていることも了解できたのではないかと思う。発信国はそういう認識を持つべきだし、世界遺産の登録審査の過程においてもそのような側面を加味して評価につなげてほしいものである。

そのうえで、いまや1000件を優に超え、費用と仕事量の両面で委員会も加盟国も持てあまし気味にすら思える世界遺産の現状から、私たちは何を優先して考慮し、そしてその先に何を目指すべきであろうか。

これまでの世界遺産委員会における議論の結果として、結果的に延期となった2020年の委員会か

ら、各国は1件を超えて審査を受けられなくなった。日本の縄文遺跡群が奄美・沖縄の候補に推されて1年先送りになったのはそのためであるが、では、何故、登録候補推薦の枠が各国1件でなければならないか、を考える。2021年、2年ぶりに開催された世界遺産委員会を経て、今や登録された遺産の総数は1154件。この数字が大きすぎて制度の危機なのか、制限するなど許しがたいという見方が正論なのか。にわかには結論を見出せない。毎年の世界遺産委員会は、新規登録候補の審査にだけ会議時間を費やすのではない。登録遺産すべてがモニタリングの対象となることを世界遺産条約は規定しており、全体のランニングコストは一方向的に右肩上がりであることはまちがいに、何らかの対策は避けられないのも事実であり、いま、委員会を構成する国々、委員会事務局である世界遺産センター、諮問機関であるイコモスやIUCNなどが知恵を絞ろうとしている。結果の一つとして、2020年から、登録審査を受ける国は1件につき最低2万ドル余りを拠出しなければならなくなった。日本としても、世界遺産がここまで国民的支持を得てきたことを踏まえれば、その制度のあり方について根幹が揺がぬよう、新たなルール作りやマンパワーの貢献に積極的に動くときではないか。まだ私見でしかないが、ユネスコ側は各国に対し、世界遺産条約に対応する法制度の整備促進を呼びかけることから始めてはどうかと思う。文化財官庁や保護制度が弱体または不十分である点は、多くの国に当てはまることであり、ユネスコがそこを後押しする形で各国の文化遺産行政のグレードが高まれば、おのずと世界遺産の世界にも新たな光明が差し込むことになるのではないだろうか。筆者自身も、イコモスの一員としての立場から微力を尽くしたいと思料する次第である。



図1. アレッポの城郭



図4. ボスラのローマ時代遺構



図2. ダマスカスのウマイヤモスク



図5. シリア北部村落の修道院遺跡
カラアト・セマン



図3. パルミラの列柱道路



図6. 十字軍の城郭クラック・デ・シュヴァリエ



図7. チャタルホユックの遺構保存状況



図10. フェニキア人の拠点だった都市ビブロス



図8. シュメール文明の中核都市ウルクの
聖域跡



図11. フランス隊の居城を望むスーサの遺跡



図9. アッシリアの古都アッシュール



図12. チョガ・ザンビールのジックラト遺構



図13. ハットゥシャの大神殿の遺跡



図16. ペルセポリス王宮のメインゲート



図14. バビロン、復元されたニンマフ神殿

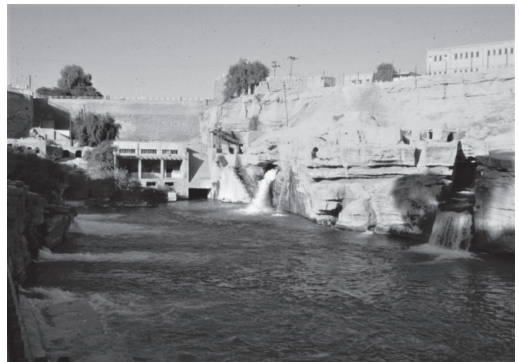


図17. シューシュタルの水利施設



図15. キュロス大王の霊廟建築

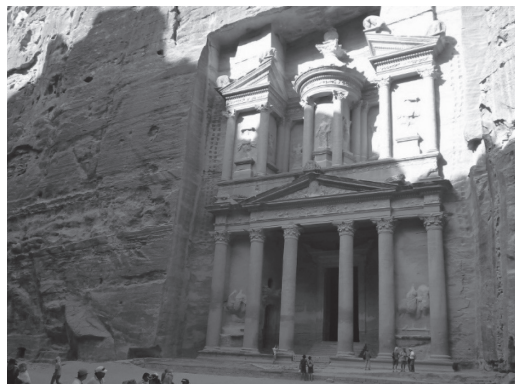


図18. ペトラの岩窟墓「アル・カズネ」



図19. ティールの凱旋門



図22. バールベック、バッカス神殿



図20. ペルガモンの円形劇場と要塞遺構



図23. ハトラの聖域正面



図21. エフェソス、セルススの図書館



図24. フィールルザーバードの王宮建築

注)

- 1) ユネスコの世界遺産サイト <http://whc.unesco.org/en/list/> は登録されたすべての世界遺産の公的な説明をはじめ、委員会決議やイコモス勧告など条約に基づく世界遺産に関するあらゆる情報を網羅する。
- 2) 日本の文化世界遺産については、文化庁が情報を提供するウェブサイト「文化遺産オンライン」<https://bunka.nii.ac.jp/> に詳しい。
- 3) 自然遺産では2007年にオマーン国の「アラビアオリックスの保護区」が削除された。文化遺産では2009年にドイツの「ドレスデン・エルベ渓谷」が、そして本年2021年にはイギリスの「リヴァプール－海商都市」が削除されている。
- 4) 原因は自然災害であったり武力紛争であったり様々だが、遺産価値への影響が深刻なケースが世界各地で生じている。なかには登録された世界遺産の保全が困難な場合も少なくない。世界遺産条約に「危機に瀕した遺産」が規定される所以である。これに関して条約第11条第4項は次のように定める。「世界遺産委員会は、事情により必要とされる場合には、世界遺産一覧表に記載されている物件であって、保存のために大規模な作業が必要とされ、かつ、この条約に基づいて援助が要請されているものの一覧表を『危険に瀕した in danger 世界遺産一覧表』の表題の下に作成し、常時最新のものとし及び公表する」と。加えてその危機の要因として、「大規模な公共事業若しくは民間事業又は急激な都市開発事業若しくは観光開発事業」とならんで「武力紛争の発生及びそのおそれ」「大規模な災害及び異変」なども条文中に列挙されている。
- 5) 評価基準については、上記「文化遺産オンライン」上の「世界遺産」頁に掲載の資料「世界遺産条約履行のための作業指針」（原文は、上記ユネスコのサイトに示される The Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention）を参照されたい。文化遺産の評価に関わる基準（i）～（vi）にあたる日本語は、文化庁により以下のように訳されている。
 - （i） 人間の創造的才能を表す傑作であること。
 - （ii） ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展において人類の価値の重要な交流を示していること。
 - （iii） 現存する、あるいはすでに消滅してしまった文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。
 - （iv） 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関する優れた見本であること。
 - （v） ある文化（または複数の文化）を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地利用の優れた例であること。特に抗しきれない歴史の流れによってその存続が危うくなっている場合。
 - （vi） 顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連があること（極めて例外的な場合で、かつ他の基準と関連している場合のみ適用）。

- 6) Advisory Body evaluation (ICOMOS) (1981)、及び The World Heritage Committee/44th session of the Committee (44 COM) /Item 10: Old City of Jerusalem and its Walls (site proposed by Jordan) による。(上記注1)を参照)。
- 7) 日本のユネスコ加盟は1951年。日本の主権を認めるサンフランシスコ講和条約の発効が1952年、国連への加盟は1956年であった。日本も被占領国のうちにユネスコ加盟を果たしており、ユネスコにとって決して例外的な措置ではなといえる。
- 8) 上記注5) 参照のこと。
- 9) 2012年 Advisory Body Evaluation (ICOMOS) (上記注1) 参照)。
- 10) 2019年第43回世界遺産委員会決議 43 COM 14 による。
- 11) 「暫定リスト」とは、締約国が将来世界遺産一覧表に登録することが望ましいとみなす遺産物件を別の一覧表としてユネスコに提出したものをいう。これに記載されなければ締約国といえども世界遺産として推薦することができない。上記注5) の「作業指針」第62～76項参照。
- 12) 2013年第37回世界遺産委員会決議 37 COM 7B.57 による。
- 13) 岡田保良 2003.09「アッシュール遺跡とイラクの世界遺産」(ACCU奈良『文化遺産ニュース』vol. 9, p.7)。
- 14) 2021年第44回世界遺産委員会決議 44 COM 7A.6 による。
- 15) 2021年第44回世界遺産委員会決議 44 COM 7A.8 による。以上の危機遺産3遺跡の現況は、ユネスコの世界遺産サイトに紹介されているそれぞれの「保全状況報告書State of Conservation Report」に詳しい。
- 16) 2016年 Advisory Body Evaluation (ICOMOS) (IUCN) (上記注1) 参照)。
- 17) 2019年 Advisory Body Evaluation (ICOMOS) (上記注1) 参照)。
- 18) 評価基準については上記注5) を参照のこと。
- 19) 2008年に現地を訪ねた常木晃氏によると「共通する祭祀を行いつつもトーテムを異にするという、まさに民族誌に見るような部族連合的な社会がそこに現出していた」と考えたくなるとの所感を残している。2009.01「ギョベックリ・テペと部族社会」(『セム系部族社会の形成 Newsletter』No. 13 所収)。
- 20) アッシュールのパルティア時代の王宮については、筆者が紹介したことがある。1995.07『東洋建築史図集』(彰国社刊)「パルティア時代の建築」を参照されたい。
- 21) タハテ・スレマーンの建築については、注20) の文献中「ササン朝ペルシアの建築」を参照されたい。